

Journal of Chubu University Education

No. 21
2021

【実践研究・実践報告】

2020年度の全学英語教育に関する報告

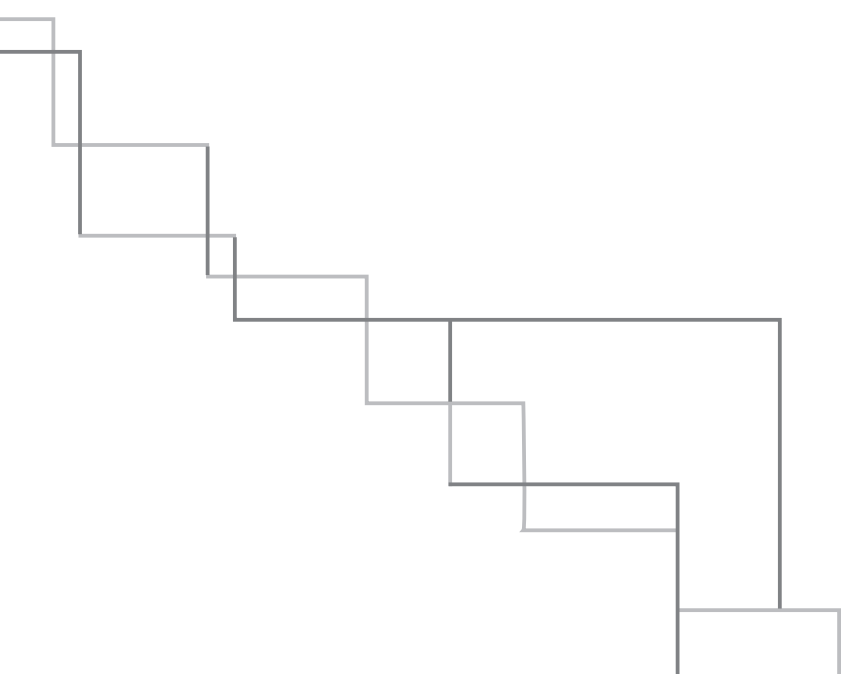
ーオンライン授業への取り組みー 大門正幸・今村洋美
西村 智・和田珠実
加藤由崇・中島真吾

【Practical Reports】

A Report on English Education in 2020

How We Manage Online Classes

..... OHKADO Masayuki, IMAMURA Hiromi,
NISHIMURA Satoshi, WADA Tamami,
KATO Yoshitaka and NAKASHIMA Shingo



2020年度の全学英語教育に関する報告

ーオンライン授業への取り組みー

大門 正幸^{*1}・今村 洋美^{*1}・西村 智^{*1}・和田 珠実^{*2}・加藤 由崇^{*3}・中島 眞吾^{*3}

要 旨

全学英語教育科（現：人間力創成総合教育センター・語学教育プログラム）では、2010年度に教育理念・方針を策定して以来、それに沿って教育を行い、その成果と課題について本誌で報告してきた。2020年度については、新型コロナウイルス感染症拡大に伴って決定された授業実施方針により初年次の英語科目である「英語スキルⅠ／Ⅱ」は全て遠隔で行われることとなった。本稿では、この決定を受け急遽実施されることとなった春学期の「英語スキルⅠ」の遠隔授業に焦点を当て、その運営方法・成果・課題などについて、担当教員に行ったアンケート結果を中心に報告する。また、一部のクラスで行った受講生へのアンケート結果や、成績評価についても述べる。

キーワード

英語教育、遠隔授業、アンケート調査

1 はじめに

全学英語教育科（現：人間力創成総合教育センター・語学教育プログラム）では、2011年度の全学共通教育のカリキュラム改訂に合わせて教育理念・方針を策定、公表すると同時に（大門他，2010）、それに沿った教育を実施し、その結果・成果・課題について報告を行ってきた（大門他，2011；2012；2014；2015；2016；2017；2018；2019；2020、和田他，2013a；2013b、Imamura et al., 2019、Wada et al., 2014）。しかしながら、2020年度については、新型コロナウイルス感染症拡大に伴って決定された授業実施方針により、初年次の英語科目である「英語スキルⅠ／Ⅱ」は全て遠隔で行われることとなったため、急遽遠隔授業への対応を迫られることとなった。本稿では特に混乱状態にあった2020年度春学期の「英語スキルⅠ」の授業において、どのような対応がなされ、どのような成果・課題が明らかになったかについて、担当教員に対して実施したアンケートに基づいて報告したい。また、受講生側の反応の一例として、著者らが受講生に対して行ったアンケートの結果についても報告する。なお、本稿の2～4節の主要部分は大学英語教育学会において発表している（今村・大門，2020）。

して独自に作成した教科書準拠の教材のいくつかがオンライン上で利用可能になっており、遠隔授業の実施に際して、それらが大きな役割を果たした。そのような教材の一つが図1に示したwebページである。

Discoveries: Strategies for Academic Reading 音声・小テスト・単語リスト

1章 Playing Games to Manage Pain (上級)

アメリカ英語・150WPM (一括)

章	題名	段落①	段落②	段落③	段落④	段落⑤
---	----	-----	-----	-----	-----	-----

アメリカ英語・100WPM (一括)

章	題名	段落①	段落②	段落③	段落④	段落⑤
---	----	-----	-----	-----	-----	-----

イギリス英語・150WPM (一括)

章	題名	段落①	段落②	段落③	段落④	段落⑤
---	----	-----	-----	-----	-----	-----

イギリス英語・100WPM (一括)

章	題名	段落①	段落②	段落③	段落④	段落⑤
---	----	-----	-----	-----	-----	-----

小テスト：前半・後半 (PDFファイル)

単語リスト (PDFファイル)

単語：アメリカ英語 (一括)

共通・前半	burn	effective	environment	lose track of time	patient
共通・後半	positive	scientist	three-dimensional	treatment	victim
共通・後半	brain	combination	design	experience	further
上級用・前半	ignore	pain	participant	result	subject
上級用・後半	explore	extremely	generally	phenomenon	specifically
上級用・後半	colleague	feature	illusion	immerse	verify

単語：イギリス英語 (一括)

共通・前半	burn	effective	environment	lose track of time	patient
共通・後半	positive	scientist	three-dimensional	treatment	victim
共通・後半	brain	combination	design	experience	further
上級用・前半	ignore	pain	participant	result	subject
上級用・後半	explore	extremely	generally	phenomenon	specifically
上級用・後半	colleague	feature	illusion	immerse	verify

図1 受講生用教材の一部

2 授業教材

2020年度以前から「英語スキルⅠ／Ⅱ」の授業用と

*1 人間力創成総合教育センター 語学教育プログラム 教授
*3 人間力創成総合教育センター 語学教育プログラム 講師

*2 人間力創成総合教育センター 語学教育プログラム 准教授

図1で表示されているのは教科書内の全12章のうちの第1章に対応したページであるが、いずれの章においても構成は同じで、当該のページには以下のリンクが張られている：(i) 英文の音声（アメリカ英語、イギリス英語で、章全体を一括して音読したものと、各段落を個別に音読したもの。音読の速度は通常 [150 wpm]と学習者用の遅い速度 [100wpm] の2種類）；(ii) 教科書に準拠した小テスト；(iii) 重要単語のリスト；(iv) 各単語の音声。

また、図2に示すように、カード型オンライン学習教材であるQuizletを使い、教科書の重要単語だけでなく、チャンク・リーディングが可能なように教科書の英文をチャンク化し、対応する日本語を付けたものが準備されている（Quizletの活用方法については、大門（2018）、加藤他（2017）を参照）。



図2 Quizletの画面

さらに、教科書の各章の最後に掲載されているComprehension Questionsをオンラインで実施することが可能なCheckLinkというシステムが導入されている（図3）。



図3 CheckLinkの説明画面

これらの教材が遠隔授業においてそのまま活用可能であったことは授業準備の負担軽減という点で大きかったと言えるであろう。

3 授業開始まで

感染症拡大による緊急事態宣言の発令という前代未聞の状況下、以下のような慌ただしい経緯を経て5月7日からの授業実施となった。なお、以下の通知、案内の発信元はいずれも中部大学の関連部署である。

- 4月1日（授業開始日・授業実施方法いずれも未定の時点）：遠隔授業の方法として同時双方向型とオンデマンド型の2種類を想定していることが記載された、文部科学省からの「学事日程等の取り扱い及び遠隔授業の活用に関するQ & A等の送付について」が配信される。
- 4月6日：教育担当副学長より遠隔授業の可能性があるが、その場合には学内ですでに採用されているCoursePowerの利用が基本となる旨、通知される。ほとんどの担当者にとって馴染みのないシステムであったため、対応策を検討。使用方法の説明動画制作や小テスト等のCoursePower上への掲載に着手する（図4参照）。
- 4月9日：教育担当副学長より春学期は全ての授業を対面ではなく遠隔授業で行うことが決定された旨、通知される。
- 4月10日：教育担当副学長よりCoursePowerやメールの講習会の案内が届く。
- 4月14日：教務支援課より上記の講習会に関するより詳しい案内が届く。
- 4月16日：語学教育プログラムで授業方法に関する案内文を作成し担当者に送付する（図4）。
- 4月17日：教育担当副学長・ICT活用部門担当副学長よりネットワークの容量の関係で一度に送受信できるファイルの容量および連続で利用可能な時間を制限する旨、通知される。
- 4月22日：CoursePowerの不具合（一部のブラウザでは下線が表示されない）が見つかり、語学教育プログラム内で対応を協議する。
- 4月23日：教育担当副学長より「授業開始の4日前までにどのような方法で授業を行うかを学生に連絡するように」との通知がある。遠隔授業として可能な方法を明確にするため、文部科学省に直接連絡し、4月1日の通知にあった2種類の方法が基本となることを再確認する。
- 4月28日：教育担当副学長・ICT活用部門担当副学長よりネットワークの容量が不足するため受講生を学籍番号によって偶数と奇数に分け、日によって利用可能者を決定するとの通知。CoursePowerによる一斉授業が不可能となる。
- 4月30日：教育担当副学長より「遠隔授業であっても、対面授業と同じだけの内容、効果のある授業を

行ったことを示すエビデンスを確保しておくように」との通知がある。

- ・ 5月1日：教育担当副学長・ICT活用部門担当副学長より「ICT環境が不十分な学生もいるので、その学生にも配慮するように」との通知がある。
- ・ 5月7日：春学期の授業が開始される。

上記の日程と並行して、授業支援のために、授業内で使用可能な課題集、パワーポイント・スライド、動画などをweb上にアップロードし、さらにZoomの練習会も開催した。

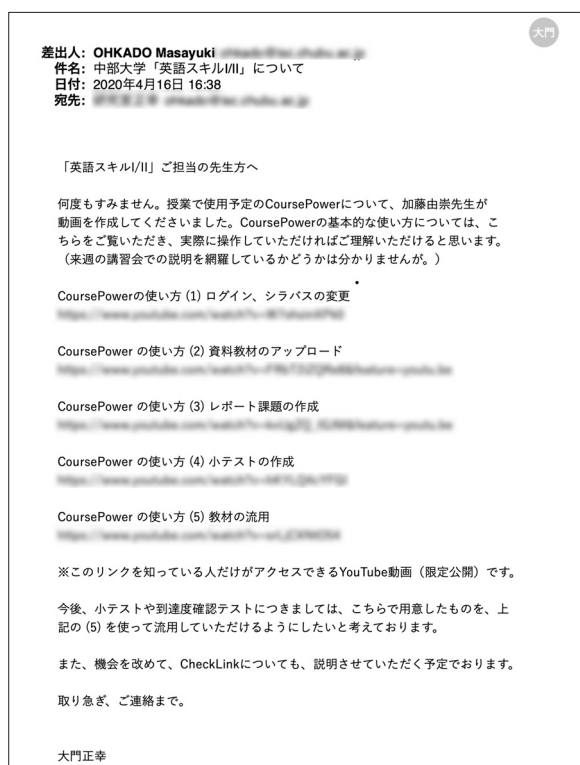


図4 担当者への連絡

4 授業後のアンケートとその結果

春学期の授業が終了した時点で「英語スキルⅠ」の担当者に対し表1に示した11の設問からなるアンケートを実施した。

非常勤講師を含む担当者25名に上記のアンケートを送信したところ、24名（96%）から回答を得た。

Q1への回答は、オンデマンド型が19名（79.2%）、同時双方向型が5名（20.8%）であった。

Q2への回答（授業で利用したシステムなど）は、オンデマンド型の授業ではメール（Tora-Net）が11名、CoursePowerが7名、PowerPointが6名、Google Classroomが2名、Quizletが2名、CheckLinkが2名、Glexaが1名であった。同時双方向型授業ではZoomが4名、Discordが1名であった。ただし、複

表1 授業後に実施したアンケート

番号	設問の内容
Q1	どのような授業形態（オンデマンド型、同時双方向型、その他）で授業を実施したか
Q2	具体的な授業内容（使用したシステムなど）
Q3	対面授業と比べ、授業運営に要した時間
Q4	担当部署（語学教育プログラム）が提供した文書、動画、素材などで役立ったもの
Q5	対面授業と遠隔授業のどちらが良いか
Q6	遠隔授業で困ったこと
Q7	教える側にとっての遠隔授業のメリット
Q8	教える側にとっての遠隔授業のデメリット
Q9	受講する側にとっての遠隔授業のメリット
Q10	受講する側にとっての遠隔授業のデメリット
Q11	その他の意見

数のシステムを使用した例やシステムの明記のなかった回答もあり、数値はあくまで参考である。

Q3については、対面授業と変わらないという回答が1名（4.2%）あったが、残りは全て対面授業と比べて長くなったというもので、その時間は約1.5倍および約2倍がいずれも4名（16.7%）、約3倍が7名（29.2%）、4倍以上が8名（33.3%）であり、遠隔授業実施への対応に多大な時間を要したことがうかがえた。

Q4については、「CoursePowerの説明動画」が19名（79.2%）と最も多く、「授業方針の説明文書」（17名 [70.8%]）、「文書、スライド、動画などの授業支援教材」（13名 [54.2%]）、「CoursePowerで利用可能なテスト」（12名 [50.0%]）／「Tora-Netの使用方方法説明文書」（12名 [50.0%]）、「Quizletの説明動画」（5名 [20.8%]）、「Zoomの練習会」（3名 [12.5%]）が続いた。

Q5については「遠隔授業の方が良い」という回答が1名（4.2%）、「対面授業の方が良い」が13名（54.2%）、「どちらとも言えない」が10名（41.7%）であった。なお、「遠隔授業の方が良い」という回答は同時双方向型授業の実施者であった。

Q6については技術的な問題を挙げる回答が最も多く（8名 [33.3%]）、「学生の反応が見えない」（5名 [20.8%]）、「準備・対応に時間がかかる」（4名 [16.7%]）が続いた。

Q7からQ10については回答結果が授業形態（オンデマンド型が同時双方向型か）と密接に関係しているように思われるので、授業形態毎に集計した結果を表2から表5に挙げる。

表2 Q7 (教える側のメリット) への回答

回 答	オンデマ ンド型	同時双方 向型
課題管理がしやすい (採点含む)	5	
充実したコンテンツが準備できた	4	
新しいLMSを学ぶことができた	1	
課題の提示がしやすい		1
印刷から解放された	2	
学生が真面目に取り組むようになった	2	1
学生への個別対応が可能		1
対面授業のストレスがない (私語を含む)	2	
コロナ感染の心配がない	2	1

表3 Q8 (教える側のデメリット) への回答

回 答	オンデマ ンド型	同時双方 向型
学生の反応がわからない	14	4*
学生への対応が難しい	2	
全体を俯瞰して見るができない	1	
グループワークができない	1	
音声指導が難しい	1	
テストの公正な実施が難しい	2	
身体への負担が大きい	2	
教材の再利用が難しい	2	

*Zoomでは受講生はカメラオフを推奨されていた

表4 Q9 (受講する側のメリット) への回答

回 答	オンデマ ンド型	同時双方 向型
自分のペースで受けられる	8	2
動画など繰り返し視聴できる	3	
学習状況の確認ができる	1	
平等に受けられる	1	
責任を持って受けられる	2	
対人関係に悩まされない	2	
教員と気楽にやり取りができる		2
コロナ感染の心配がない	2	1

表5 Q10 (受講する側のデメリット) への回答

回 答	オンデマ ンド型	同時双方 向型
受講生間のコミュニケーションの欠如/弱さ	7	2
緊張感の維持が難しい、自主性が必要	4	1
面白みにかける、一方通行	2	
課題が多くなりすぎる危険性	1	
教員による方法の違い	1	
すぐに質問ができない	1	2
時間がかかる、肉体への負担が大きい	2	

Q11には様々な回答があったが、要望としては授業で使用するシステムの共通化、Zoomアカウントの無料配付、技術的な問題が生じた場合の相談窓口の充実が挙げられた。また各教員がどのような形で授業を行っ

ているのかを知りたい、という声に対してはアンケート結果を提示することで対応した。

5 受講生の反応

2020年度の春学期は授業形態が大きく変更になったため、例年行われている学生による授業評価が実施されなかった。そのため、遠隔授業に対する受講生全体の反応について知ることはできないが、参考としてZoomを中心に同時双方向型授業を実施した大門が授業内に行ったアンケート結果と、オンデマンド型授業を行った今村、およびYouTubeを活用したオンデマンド授業を中心としながら、数回Zoomを使った同時双方向型授業を実施した加藤が授業後に自由形式で行なったアンケートの回答の一部について紹介しておきたい。

執筆者の一人である大門は、3つのクラスにおいて表6に示す11の設問からなるアンケートを無記名で実施し、104件の回答を得た (Q1からQ10についてはその理由も記入してもらった)。

表6 授業後に実施した学生用アンケート

番号	設問の内容
Q1	教員の説明は分かりやすかったですか
Q2	説明のために使用したスライドは学習に役立ちましたか
Q3	Quizletは学習の役に立ちましたか
Q4	CoursePowerの課題は学習の役に立ちましたか
Q5	授業内のグループワークは学習の役に立ちましたか
Q6	授業で行なった視覚化の作業は理解に役立ちましたか
Q7	授業でのシグナルワードに注目した読解は内容理解に役立ちましたか
Q8	遠隔授業で困ったことはありますか
Q9	遠隔授業の利点だと思ったことはありますか
Q10	対面授業と遠隔授業を選べるとしたらどちらを希望しますか
Q11	その他の感想、コメントがありましたら自由に書いてください

以下では、本稿の趣旨と合致するQ3、Q4、Q5、Q8、Q9、Q10、Q11に絞って結果を記す。

Q3、Q4はいずれも授業外で利用するオンライン教材に関するもの、Q5は授業内にZoomの機能を用いて行ったグループワークに関するものである。いずれも5段階で回答してもらったので、結果について表7にまとめて記載する。

表7 Q3、Q4、Q5への回答

回答	Q3	Q4	Q5
とても役に立った	50 (48.1%)	22 (21.2%)	42 (40.4%)
役に立った	41 (39.4%)	66 (63.5%)	48 (46.2%)
どちらとも言えない	10 (9.6%)	12 (11.5%)	11 (10.6%)
あまり役に立たなかった	2 (1.9%)	2 (1.9%)	1 (1.0%)
まったく役に立たなかった	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
回答不能	1 (1.0%)	2 (1.9%)	2 (1.9%)

回答理由について、Quizletでは「音と文字で単語の確認ができたから」という機能に関するものに加えて「自分で隙間時間に何度も取り組めるところが良かった」という自習教材ならではのコメントが多数あった。

CoursePowerについては「授業の復習になった」という趣旨の声が最も多かった。

Zoomの機能を用いたグループワークについては、「対面授業がない中で、大学のみんなと交流できる唯一の場であったのでうれしかった」という受講生間でコミュニケーションが取れる機会を評価する声が多かった。

遠隔授業で困ったことについては、表8の結果であった。

表8 Q8への回答結果（複数回答可）

番号	回答内容	回答数	割合
1	対面授業と比べ授業に参加している感じがしなかった	31	(29.8%)
2	特になし	28	(26.9%)
3	パソコン・スマホを使いこなすためのスキルが不足していた	27	(26.0%)
4	ネットワーク環境に問題があった	24	(23.1%)
5	対面授業と比べ学習意欲が湧かなかった	19	(18.3%)
6	パソコン・スマホなど機械自体に問題があった	12	(11.5%)
7	対面授業と比べ、教員の説明が分かりにくかった	3	(2.9%)
8	目が非常に疲れやすく、パソコンによる授業が困難だった	1	(1.0%)
9	最後の授業で接続不良があった	1	(1.0%)
10	たまに集中力がとぎれるときがあった	1	(1.0%)
11	家に引きこもっていて鬱気味になり、体調不良が続いた	1	(1.0%)

4分の1ほどの受講生は特に問題を感じなかったようであるが（番号2）、授業への参加感覚や意欲の欠如を感じる受講生も多かった（番号1、5）。ICTに関連する問題を感じた受講生も多く（番号3、4、6、8、9）、さらに1名ではあるが引きこもり状態となってしまう、という心配な声もあった。

逆に遠隔授業の利点については、表9に示すような回答結果であった。

表9 Q9への回答結果（複数回答可）

番号	回答内容	回答数	割合
1	場所にとらわれずに授業を受けることができた	72	(69.2%)
2	特になし	19	(18.3%)
3	対面授業と比べ、授業に参加している感じがした	5	(4.8%)
4	対面授業と比べ、教員の説明がわかりやすかった	5	(4.8%)
5	対面授業と比べ学習意欲が湧いた	4	(3.8%)
6	通学時間がかからない	4	(3.8%)
7	以下いずれも1名（1.0%）の回答 ・自分で温度調節ができる ・授業のスライドが見やすい ・何度も動画を見返すことができる ・音読の時恥ずかしくない ・ペアが一定になることがない	1	(1.0%)

やはり「場所にとらわれない」という点をあげる回答者が圧倒的に多かった。また、「対面授業より授業に参加している感じがした／説明がわかりやすかった／意欲が湧いた」という回答もあり、参加意欲や理解度に関して、対面授業と遠隔授業のどちらかが絶対的に優れているわけではないことが確認された。

Q10については「対面授業を選ぶ」という回答が60（57.7%）と半数以上だったが、「どちらとも言えない」が28（26.9%）、「遠隔授業を選ぶ」という回答が16（15.4%）であった。

Q11について目立った感想は「他には人と話したりする授業がなかったのでこのクラスで他の人とコミュニケーションがとれたことがすごく良かった」という趣旨のものであった。

オンデマンド型の授業を行った今村のクラスでは「提出物がたくさんあり大変ではありましたが、自分なりにいろいろと工夫して授業を受けられた」という自己評価の声や「自分のペースで進めていくため、時間を管理して自ら学習する能力を身につけることができた」という自主性の獲得を評価する声があった。また「英語の長文を何度も読むことで以前に比べて長文を読むことに慣れることができた」など、学力の向上を実感した、という声もあり、提出課題を工夫することで効果的な学びを提供できる可能性が示された。

YouTubeの動画を中心とした加藤のクラスでは、「動画に音声がついているおかげで内容がわかりやすく助かりました」「資料だけでなく動画で声で[ママ]説明を聞いたので理解しやすかった」「授業後に疑問ができた際でも何度も授業動画を見返すことができたので、オンライン授業にも対面にはないメリットがあるなと感じました」など動画を評価する声が多かった。また、「英語の授業だけZoomがあったので、授業を受けているなという実感が湧いてよかったです」「英語の授業でこんなに楽しいのは初めてです！特にZoomの授業は（笑）」「Zoomは先生との距離も縮まっ

たような気がしてとてもよかったです」など、Zoomを通して教員と直接コミュニケーションすることができた点を評価する声が多かった。

6 成績について

最後に成績について見ておこう。これまでの全学英语教育に関する報告（大門他、2020ほか）では、単位修得に至らない最大の原因が出席の不足にあることを示してきた。しかし2020年度については全体の出席データがないため、この点について考察することができない。ここでは、過去5年の評価の比率と比べたデータを提示するに留めておく。

表10 春学期の成績（過去5年との比較）

年度	S	A	B	C	E	計
2020	477 (18.7%)	921 (36.1%)	511 (20.0%)	396 (15.5%)	246 (9.6%)	2,551
2019	373 (16.8%)	661 (29.7%)	648 (29.1%)	426 (19.1%)	117 (5.3%)	2,225
2018	397 (16.8%)	780 (33.0%)	610 (25.8%)	445 (18.8%)	131 (5.5%)	2,363
2017	676 (28.0%)	630 (26.1%)	483 (20.0%)	468 (19.4%)	155 (6.4%)	2,412
2016	678 (25.4%)	727 (27.0%)	517 (19.2%)	504 (18.8%)	262 (9.7%)	2,688
2015	696 (29.1%)	696 (29.1%)	449 (18.8%)	454 (19.0%)	185 (7.7%)	2,390

E評価の受講生について言えば、2018年度、2019年度に5パーセント台に減っていた割合が2016年度と同程度の9パーセント台に増えてしまっている。一方、S評価とA評価の割合は増えており、二極化の傾向が見られるようである。これが一過性のものなのか、今後も注視していきたい。

7 結語

本稿ではオンラインで行われた2020年度春学期の「英語スキルⅠ」に関して、担当教員に対して実施したアンケートおよび一部のクラスの担当教員が受講生に対して実施したアンケートの結果を報告した。今回の結果を今後の教育活動に生かしていきたい。

謝辞

アンケートにご協力くださった担当の先生方、授業に活用可能な資料や情報を提供くださった方々、授業内のアンケートに協力してくださった受講生の皆さんにお礼申し上げます。

参考文献

今村洋美・大門正幸（2020）「中部大学におけるオンライン全学英语教育の取り組み－教員間連携に焦点をあてて－」大学英語教育学会第35回中部支部大会（オンライン開催）での口頭発表。

大門正幸（2018）「Quizletを活用したスピーキング・リスニング指導」『中部大学教育研究』18, 7-16.

大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明（2010）「大学英語教育に関する基本方針について－専門教育機関としての大学における英語教育の在り方を巡って－」『中部大学教育研究』10, 23-28.

大門正幸・柳朋宏・西村智・野田恵剛・山田伸明（2011）「全学英语教育に関する中間報告」『中部大学教育研究』11, 87-94.

大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明・柳朋宏（2012）「平成23年度秋学期の全学英语教育に関する報告」『中部大学教育研究』12, 81-89.

大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明・和田珠実（2014）「平成25年度の全学英语教育に関する報告」『中部大学教育研究』14, 29-37.

大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明・和田珠実（2015）「平成26年度の全学英语教育に関する報告」『中部大学教育研究』15, 65-74.

大門正幸・今村洋美・加藤由崇・西村智・野田恵剛・和田珠実（2016）「平成27年度の全学英语教育に関する報告」『中部大学教育研究』16, 89-97.

大門正幸・今村洋美・加藤由崇・西村智・野田恵剛・和田珠実（2017）「平成28年度の全学英语教育に関する報告」『中部大学教育研究』17, 35-44.

大門正幸・今村洋美・加藤由崇・西村智・野田恵剛・和田珠実（2018）「2011年度～2017年度の全学英语教育に関するまとめ」『中部大学教育研究』18, 1-6.

大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・和田珠実（2019）「2018年度の全学英语教育に関する報告」『中部大学教育研究』19, 1-7.

大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・和田珠実（2020）「2019年度の全学英语教育に関する報告」『中部大学教育研究』20, 31-36.

加藤由崇・和田珠実・大門正幸（2017）「Quizletを活用した英文読解教材の開発」外国語教育メディア学会第90回秋季中部支部研究大会での口頭発表。

和田珠実・大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明（2013a）「平成24年度の全学英语教育報告」『中部大学教育研究』13, 79-85.

和田珠実・今村洋美・大門正幸（2013b）「中部大学におけるEGAPを意識した全学英语教育カリキュラム改革」大学英語教育学会第52回国際大会（於京都大学）での口頭発表。

Imamura, Hiromi; Wada, Tamami; Ohkado, Masayuki (2019) "Utilizing a Tailor-made Textbook Focusing on EGAP at a Japanese University," poster presentation at JACET Seminar 2019, Tamagawa University, Japan.

Wada, Tamami; Imamura, Hiromi; Ohkado,
Masayuki; and Laurence, David (2014)
“An English Education Curriculum Reform

Focusing on EGAP at a Japanese University,”
oral paper at AILA World Congress 2014,
Brisbane, Australia.

A Report on English Education in 2020 How We Manage Online Classes

OHKADO Masayuki^{*1}, IMAMURA Hiromi^{*1}, NISHIMURA Satoshi^{*1},
WADA Tamami^{*2}, KATO Yoshitaka^{*3} and NAKASHIMA Shingo^{*3}

*1 Professor, Language Program, Global Education Center, Chubu University

*2 Associate Professor, Language Program, Global Education Center, Chubu University

*3 Senior Assistant Professor, Language Program, Global Education Center, Chubu University

Abstract

When comprehensive curriculum revision was made in 2011 for General Education in Chubu University, the division of English Education (Language Education Program, Global Education Center) established a new educational policy and has been providing education based on it and reporting the results as measured by the achievement tests, the freshman test, and the proficiency test. In the spring semester in 2020, however, because of the spread of COVID-19, classes were held online. At the end of the spring term in 2020, we conducted a questionnaire survey of teachers in charge of the “English Skill I” classes and we report the results of it. We also report the results of questionnaire surveys of students taking online classes which were conducted in some classes.

Key words

English Education, Online Classes, Questionnaire Survey